

卷頭言

連帯におもう

——前尾繁三郎先生のご冥福を祈りつつ——

学長 水谷 幸正

八〇年代は激動の時代である、とよく耳にする。なるほど、今年になってからでもその兆を世界のあちこちにみることができる。いな兆にとどまらず、すでに激動している地域もあることは周知のとおりである。さまざまな問題があるにしても、かなり安定した日本国の住民であることをありがたく思うことがある。しかし、世界の安定なくして日本のほんとうの安定はありえないのである。世界と共に日本は生きているのだ。そのありようを仏教では「縁起」と言い「共生」と言うが、「連帯」と言いかえてもよい。

この初夏に、激動するポーランドから来日した連帯労組委員長ワレサは、さわやかな一陣の涼風を日本の各界に送りこんだ。連帯感という言葉を日常よく用いているように、「連帯」という概念は目新しいものではな

いが、その具体的なありようをワレサは日本人に示していった。それは何か。すべての存在は（人間に限らず、動物も植物も自然界も）持ちつ持たれつの助け合いによって生かされているということ、そしてその（連帯の）心情の根拠は信仰心にある、ということである。

絶対者に向かって祈ることから、ワレサの行動がはじまる。人びとの幸せを祈ることから連帯感がはじまる。自分以外の何かに対して信仰を持たないものは人間ではない、とまでワレサは言いきっている。この心こそ大いなる「いのち」の世界に共に生かされて生きている、という法然上人の念仏精神でもある。これからの人類の指導原理をここに求めなくてはなるまい。

いま、この稿を草しているさ中に、尊敬する前尾繁三郎先生の突然の訃報に接す。愕然として暗澹たる想いであるが、ただただ冥福をお祈りするのみ。おもえば、真の政治家ともいうべき超俗的な大人物であった。清濁あわせのむ抱擁力の豊かな人であった。先生の風格こそ、前述した「連帯」のシンボリックな存在でもあった。本学の教育振興会会長として貢献して頂いた大きな功績に心から感謝するとともに、先生とのお約束であったすばらしい付属小学校をいち早く創設することを誓うものである。偉大なる先生の残照加佑のもとに、教職員をはじめ有縁各位一同の連帯を願ってやまない。